

ヴィルヘルム・グリムの再話法

—同時代人との比較のなかで—

小澤俊夫

近年、グリム兄弟による『子どもと家庭のメルヒエン集』について

は、様々な角度からの研究が発表されている。本論では、口伝えのメルヒエンとしての様式について論ずる。

昨年の本学会大会において、私は「閑敬吾から受け継ぐもの、受け継がなかつたもの」という題で意見を述べた。昔話研究における偉大な先達である閑敬吾が残した業績は、はかり知れなく大きいものがある。そしてその後日本昔話の伝播論に關しては、近隣諸国との関係がいっそう詳しく調査研究されつつある。私はその一方で、閑敬吾がほとんど注目しなかつた点を昨年の大会において指摘した。

つまり、昔話の内部の分析である。

昔話の内部といった時、問題にされるべきことは、物語としての構造、そして物語としての叙述の様式、また昔話の各要素が持つ機能という三つの側面が考えられる。ここでは、昔話が口伝えの物語として持つている様式についてとりあげたい。そして、グリム兄弟、特にヴィルヘルム・グリムが口伝えのメルヒエンの様式をいかに理解し、再話に際して実現していたかを同時代の他の作家たちの再話

と比較しながら、考察する。

メルヒエンの様式的研究としては、二十世紀に入つて目ざましい発展が遂げられた。まず、デンマークのアクセル・オーリクが三回の繰り返しや、最前部優先、最後部優先の法則などを明らかにした。さらにドイツの文芸学者ローベルト・ペッチュがメルヒエンの登場者の図形性などを指摘し、また、メルヒエンの登場者たちが遊戲的に話のすじを進めていくという点を明らかにした。そして一九四七年、スイスのマックス・リュティは『ヨーロッパの昔話』を発表し、昔話の様式的研究を完成させた。

グリム兄弟は一八一二年から一八五七年にかけて『子どもと家庭のメルヒエン集』を編んだ際に、体系的理論としての様式論を意識していた様子はない。それにもかかわらず、今日の昔話に関する様式論的観点から振り返ってみると、ヴィルヘルムのメルヒエンの再話法には様々な点での工夫が見られるのである。

私はこれまで、ヴィルヘルムが先行する昔話集から話を採用した際、どの様に手を加えて自らのメルヒエン集に収めたかをいくつか

の実例にあたって点検してきた。

例えば「天国の仕立屋」という話については、グリムは十六世紀前半に書かれたイエルク・ヴィクラムの『乳母車の本』からと、同じく十六世紀半ばのヤーコブ・フライによる『庭園の集い』からの話を合成して作り上げている。

また、「ラプンツェル」については、一六九八年にフランスのマドモアゼル・ド・ラ・フォルスの「ペルジネット」という作品を、一七九〇年にドイツのシュルツが翻訳なしし翻案して発表した創作物語を昔話風に再話している。⁽¹⁾この時のグリム兄弟の再話法についても検討したことがある。

本論では白雪姫に限定し、かつ、グリム兄弟とほとんど同時代の二人の作家による再話と比較しつつ検討してみたい。

十九世紀におけるドイツのメルヒエンの再話者としては、しばしばヨーハン・アウグスト・ムゼーウスの名があげられる。ムゼーウスの場合には、伝説と昔話をはつきり区別せず双方の題材を自らの物語の素材として使っているので、ここではメルヒエンの再話としてグリムと対比することは適当ないと考える。しかし、ムゼーウ

スの文体がいかなるものであったかは、最近本学会員の鈴木満氏による翻訳が発表されているので参考されたい。⁽²⁾グリム童話の実例として白雪姫をとりあげ、悪い繼母によって毒殺される場面を検討する。

うせい)「A」

「むすめさん、ちょっと」と、行商人のおばあさんがいました。「あんたのむすびかたはひどいねえ！　おいで、一度、ちゃんとむすんであげよう」。

白雪姫は、すこしもうたがわず、行商人のおばあさんの前に立て、新しいひもで、胸をしめてもらいました。ところが、年とった行商人が、すばやく力いっぱいきつくしめたので、白雪姫は、息ができなくなり、死んだようになたおれてしましました。

「この美人も終わりさ」と、わるい女は、いって帰っていきました。それからまもなく夕方になると、七人のこびとが帰ってきました。けれども、かわいい白雪姫が床にたおれているのを見て、びっくりしました。白雪姫は、まるで死んだように、すこしも動きません。こびとたちは、白雪姫をだきあげてみました。すると、ひもできつくしめられているのがわかったので、ひもを、まつぶたつに切りました。すると、白雪姫は、かすかに息をはじめ、だんだんに生きかえってきました。

〔B〕

白雪姫が、そのくしを買うと、年とった女がいました。「じや、ひとつ、わたしがあんたのかみをくしけずつてあげよう」。白雪姫はすこしもうたがいません。年とった女は、くしを白雪姫のかみの毛、深くさしました。すると、たちまち、毒がはげしくきいて、白雪姫はたおれて死んでしまいました。

〔例1〕　白雪姫第二版、一八一九年（『完訳グリム童話』所収、ぎよ

「さあ、いつまでも、そこで寝ててもらおう」。おきさきはそう

いって、帰つていきました。

ところが、さいわいなことに、まもなく夕方になつて、七人のこびとがうちへ帰つてきました。そして、白雪姫が床にたおれているのを見ると、こびとたちはすぐに、あのわるいおきさきが、また白雪姫を殺そうとしたのだと思いました。そして、あちこちさがして、毒のくしを見つけました。そのくしをぬきとつてやると、白雪姫は、気がつき、きょうのでき」と話を聞いて聞かせました。

〔C〕

ところが、このリンゴは、とてもじょうずにできていて、赤いほうだけ毒がはいつていたのです。白雪姫は、この美しいリンゴを見て、食べてみたいと思いました。そして、お百姓のおばさんが、リンゴを半分食べるのを見ると、もうがまんできなくなつて、手をのばして、リンゴをうけとりました。ところが、ひとくち食べると、床にたおれて死んでしまいました。

〔D〕

夕方になつて、こびとたちがうちへ帰つてみると、白雪姫が床にたおれています。もう、すこしも息をしていません。死んでいます。こびとたちは、白雪姫をだきあげて、なにか毒のものがないかと、さがしてみました。コルセットのひももゆるめてみました。かみの毛もくしけずつてみました。からだを水とワインとであらつてもみました。けれども、なんの役にもたません。かわいい白雪姫は、死んでしまい、生きかえりませんでした。

こびとたちは、白雪姫をたんかに乗せて、七人がみんな、そのた

んかにすがつて泣きました。三日間というものが泣きつけました。それから、こびとたちは、白雪姫を土にうめようと思いました。けれども、まるで生きている人間のように、生きいきとしていて、ほおは、まだ美しく赤いので、こびとたちはいました。「この人を、あの黒い土のなかにうめることはとてもできない」。

〔E〕

王子がそういうと、やさしいこびとたちは王子に同情して、ひつぎをくれました。それで、王子は、召使いたちのかたに、ひつぎをかつがせて歩きはじめました。すると、召使いたちが、やぶに足をとられてよろめきました。そのひょうしに、白雪姫が飲みこんでいた、毒のリンゴのひときれが、のどからとびだしました。そして、白雪姫は生きかえり、身を起こしました。

白雪姫はいました「まあ、たいへん、わたしどこにいるのかしら」。けれども、王子は、大よろこびしていました「きみは、ぼくのそばにいるんだよ」。

段落Aでは、「行商人が、すばやく、力いっぱいきつくしめたので、白雪姫は、息ができなくなり、死んだようになつてたおれてしましました」となっている。ここでは窒息死しかけているものと思われる。ところが、夕方になるとこびとたちが帰つてくる。そして、「ひもを、まつぶたつに切りました。すると、白雪姫は、かすかに息をはじめ、だんだんに生きかえつてきました」とされている。もし、白雪姫が窒息して死んだようになつていたとすれば、時間が

たって夕方になってからそのひもを切ったとしても、生きかえらない可能性の方が高いはずである。つまり、夕方までには数時間たっているからである。ところがここでは生きかえってくる。つまり、窒息はしていなかつたことになる。

ここでは窒息が問題なのではなくて、白雪姫の美しい姿をひもがじやましていた。そのじやまなひもを切り落としたらもとの形が回復したのが問題なのである。それで命がよみがえった、ということになつてゐる。しかもこの白雪姫は、少しも具体的に描写されていない。つまり白雪姫の服がいかなるものであったか、また白雪姫の身長が、あるいは白雪姫の肌の様子がどのようなものであつたかといふ具体的な描写はない。ただ白雪姫という真っ白な、そして髪の毛の真っ黒な、唇の真っ赤な図形として述べられているのである。

そこでまとめて言うと、この場合白雪姫の窒息という生理現象が語られているのではなく、図形としての白雪姫の美しい姿がひもによつてじやまされていた。そのじやまなひもを切りとつたらもとの美しい図形がよみがえり、生命がよみがえつたという語り方である。ということがわかる。

このことは、二回目にについてみるとどうはつきりわかる。

段落Bでは、年とった女が「あんたのかみをくしけずつてあげよう」と言つて、「くしを白雪姫のかみの毛、深くさしました。すると、たちまち、毒がはげしくいて、白雪姫はおれて死んでしまいました」となつてゐる。ところが毒殺されたはずの白雪姫なのに、「夕方になつて、七人のこびとがうちへ帰つてきました。……そし

て、あちこちさがして、毒のくしを見つけました。そのくしをぬきとつてやると、白雪姫は、気がつき、きょうのできごとを話してくださいました」と語らわれている。

つまりここでも毒の化学性はまったく問題にされず、白雪姫の美しい図形をくしが妨害していた。その図形をこわしているくしを取つて、もとの美しい図形が回復されると命がよみがえるという語り方をされていることがわかる。つまり、毒の化学性はまったく問題にされていないのである。

三回目に殺された時にも事情はまったく同じである。段落Cにおいて、白雪姫は、お百姓のおばさんがさし出したリンゴを「ひとつち食べる」と、床にたおれて死んでしまいました」と語らわれている。つまり毒がきいて死んだものと思われる。そして段落Dによれば、夕方になつてこびとたちが家へ帰つてくる。ところが、こびとたちは白雪姫のからだのどこからも毒のものを見つけることができない。つまり、コルセットのひもをゆるめ、かみの毛をくしけずつてみても発見できないし、からだを水とワインで洗つてみても毒を取り去ることができない。つまり、ここでは毒の化学性を言つているのではなくて、物質としての毒のものが想定されていることがわかる。

そして段落Eになると、毒を飲みこんだまま死んでいる白雪姫の「ひつぎをかつがせて、歩きはじめました。すると、召使いたちが、やぶにあしをとられてよろめきました。そのひょうしに、白雪姫が飲みこんでいた、毒のリンゴのひときれが、のどからとびだしました。そして、白雪姫は生きかえり、身を起こしました」と語られて

いる。ここでも毒の化学性は問題にされていない。白雪姫が死んだのは、のどに毒のリンゴがひっかかっていたからであり、そのリンゴが飛び出せば命は生きかえるというのである。つまり、ここでも前二回と同様、のどを图形的にじやましていたリンゴが除かれて、もとの图形が回復すれば、命がよみがえるという語り方であることがわかる。

この部分には昔話に広く見られる独特な語り方がもう一つ潜んでいる。それは、時間の処理の仕方である。

段落Bでは、白雪姫が倒れてからまもなく夕方になるところ

ちが家へ帰ってきた。そして、毒のくしを抜きとつて白雪姫を生き

かえらせた。ところが、こびとたちは翌日になると全員で出かけてしまっている。そして白雪姫が留守中に毒のリンゴを食べて床

に倒れて死んでから、夕方になつて帰ってくる。つまりこびとたちはあたかも白雪姫が死ぬのを待つて帰ってきたかのように、白雪姫の死を予防する事がない。もし、ここでこびとたちがいつもより早く仕事を仕上げて帰つてくれば、お百姓のおばさんと鉢合わせをするかもしれない。すると、三つ巴の激しい場面が生まれることだろう。昔話はそのような三つ巴の複雑な場面を語らないのが常である。つまり、時間がきれいに整理されているということができる。

このように見てくるとグリム童話第二版においてすでにヴィルヘルムは、白雪姫のこの場面について、口伝え昔話として基本的に重要な性質を敏感に感じとつて実現していることがわかる。つまり、

窒息という生理現象や毒の化学性という実態を語るのではなくて、图形として語られている白雪姫を他のものが图形として妨害している。そのため命が失われたのを、その妨害を除くことによって命を回復させるという語り方をしていることがわかる。また時間については、まるで死ぬのを待つてから帰ってきたかのように、きちんと整理して語つてわかるのである。

この第二版の毒のリンゴからの生きかえり方に対しても、初版本においても、原理はまったく同じ語り方をしていたことがわかるのである。

例2 白雪姫 グリム兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』初版
(一八一二年)

それでこびとたちは王子に同情し、棺を与えました。王子は棺をお城へかついで行かせ、自分の部屋に置かせました。彼は一日中その脇にすわり、目を離すことができませんでした。外出して、白雪姫を見られないときには、悲しくなりました。棺がそばになければ、一口も食べられませんでした。たえず棺をかついでまわらなければならぬ召使いたちは腹を立てました。とうとう、ひとりが棺を開け、白雪姫をかつぎあげて、いいました。「こんな死んだ娘のために、おれたちは一日中苦しい目にあわされるんだ。」そして、背中をなぐりました。そのひょうしに、彼女がのみこんだ毒りんごのかけらがのどからとびだし、白雪姫は生き返りました。

ここでは、手荒いことに召使いたちが腹を立てて「こんな死んだ娘のために、おれたちは一日中苦しい目にあわされるんだ」「そして、背中をなぐりました。そのひょうしに、彼女がのみこんだ毒のりんごのかけらがのどからとびだし、白雪姫は生き返りました」と語られている。大変乱暴な行為だが、毒の化学性ではなくて、あるものが図形としてじやまをしているのを除けば生きかえる、という原理が初版本においてすでに実現されていることがわかる。

ところで、以上述べた昔話の独特な語り方と同じものが日本の昔話においても見られる。一例として宮城県登米郡において記録された「馬方山姥」を見るに至る。

〔例3〕
馬方山姥（登米郡中田町石森・女）

〔A〕

むかしあつたおな、ほれ。ある馬方がどうさり魚つけて、ある時まで来たら、松の木の蔭からスーと山姥が出て来て、「これ、魚置いてけ」と言つたんだと。馬方はおつかなくなつて、ワラワラ片荷だけ下ろして逃げたんだと。山姥はバリバリ食つて、「これ、待つてろ。さつぱど置いてげ。置かざら、うぬどこ取つて食うぞ」と追つかけて來たんだと。馬方はおつかなくなつて、もう片荷下ろして、裸馬さ乗つて逃げたんだと。山姥はバリバリ食つて、「これ、待つてろ。馬の足一本置いてげ。置かざら、うぬどこ取つて食うぞ」と追つかけて來たんだと。馬方は、「ほーれ」と、足を一本やつて、三本足の馬さ乗つて逃げたんだと。山姥はバリバリ食つて、「こ

れ、待つてろ。もう一本置いてげ。置かざら、うぬどこ取つて食うぞ」と、追つかけて來たんだと。馬方は、「ほーれ」と、もう一本やつて、二本足の馬さ乗つて逃げたんだと。山姥はバリバリ食つて、「これ、待つてろ。もう一本置いてげ。置かざら、うぬどこ取つて食うぞ」と追つかけて來たんだと。

〔B〕

これはええ隠れ家だと思つて、二階さ上がつてホッとしてたら、さつきの山姥が、「ああ、さめさめ（寒い寒い）」て、入つて來たんで、たんまげてしまつたんだと。ほうして、「あま酒でもわかして飲むべ」と、ノンノンと火をたいて、鍋をかけて背中あぶりしてのうちに、クランクランねぶかけ（居眠り）始めたんだと。馬方は屋根から茅を抜いて、ツバツバ吸い上げたんだと。山姥が目をさまして、「あま酒を飲んだ奴は、だんだ」と、どなつたんだと。馬方が「火の神、火の神」と言つたら、山姥が、「火の神さんなら仕方ねえなあ。ほだら、餅でも焼いて食うべ」と言つて、餅を焼きながら背中あぶりしてのうちに、また、クランクランねぶかけ始めたんだと。馬方はブーッとふくれた餅さックと茅を刺して、つりあげて食つてしまつたんだと。山姥が目をさまして、「餅を食つた奴は、だんだ」と、どなつたんだと。

この資料は仙台市在住の佐々木徳夫氏が記録されたものである。Aの場面は、日本の昔話の中でも特に優れたファンタジーの場面といふことができよう。それを分析的に見ると次のようなことが言え

る。つまり、山姥に「馬の足一本置いてげ。置かざら、うぬどこ取つて食うぞ」と言われた馬方は、「ほーれ」て、足一本やつて、三本足の馬さ乗つて逃げたんだと」と語られている。次にも同じようになつて、「もう一本やつて、二本足の馬さ乗つて逃げたんだと」となつて、つまることでも、馬の足を切つた時の様子や切られた馬の苦しみなどは一切語られていない。しかも、まるで切り紙細工の馬の足を一本はさみで切つたように簡単に切れ、血が流れたという言葉もない。これは、白雪姫において窒息という生理現象や毒性について語らなかつたと同じよう、馬の実態や馬の肉体を語らず、图形的に馬の足を切断したということができる。图形的であるから、三本足になつても馬は性能を落とさずに走ることができる。二本足になつても同じである。つまりここでは、実態的に語らないという特性と、图形的に語るという特性が同じく見られるのである。

段落Bでは、白雪姫で見たのと同じ、きれいに整理された時間が観察される。つまり、山姥は『あま酒でもわかして飲むべ』て、ノンノンと火をたいて、鍋をかけて背中あぶりして、クリンクリンねぶかけ始めたんだと。馬方は屋根から茅を抜いて、ツバツツ吸い上げたんだと。山姥が目をさまして、『あま酒を飲んだ奴は、だんだ』て、どなつたんだと」と語られている。つまり、山姥はわざわざあま酒をわかつために鍋を火にかけたにもかかわらず、ちょうどあま酒がわいてきたころ眠りこみ、馬方に全部吸われてから目を覚ましている。餅についても同じである。「餅を焼きながら背中あぶりしてのうちに、また、クリンクリンねぶかけ始めたんだと。

馬方はブフーッとふくれた餅さックと茅を刺して、つりあげて食つてしまつたんだと。山姥が目をさまして、『餅を食つた奴は、だんだ』て、どなつたんだと。」

ここでも山姥は、餅を食べようとして火にかけたにもかかわらず、ちょうど焼けてきたころ居眠りを始め、全部食われてから目を覚ましている。つまり、鉢合せしないように語つているという意味で、時間がきれいに整理されているということができる。この語り方は、白雪姫において、こびとたちがあたかも白雪姫が殺されるのを待つて帰ってきたように、決して百姓のおばさんと鉢合せしない語り方をしているのと同質の語り方である。

本講演においては、時間の制約上、これ以上例を挙げることはできないが、伝承の昔話の語り口を点検してみるとこののような独特な語り方がある。しかも、グリムは十九世紀前半においてすでにその特性を感じとつて、再話において実現しているということがわかる。グリムとほとんど同時代のハイデルベルクにアルバート・ルートヴィッヒ・グリムという人がいた。彼は『ドイツのメルヒエン』といいうメルヒエン集を発表して、これは当時かなり人気を博していた。そのなかでアルバート・グリムは白雪姫を扱っている。アルバート・グリムの白雪姫は、芝居のための台本の形をとつて、それゆえ口伝えのメルヒエンのスタイルとはまったく異なるものとなつていて、それでも台本のなかで白雪姫が毒の果物を食べさせられる場面をみると、伝承の昔話とはまったく異なる方法で描写していることがわかる。

Albert Ludwig Grimm の「白雪姫」(第一章 ガラス山の上、こびとの城の一室)

女王が美しい女に変装して来訪。白雪姫が結婚することになつて、いる美しい王子から依頼されたとしていちじくをとりだす。

女王「この山の上では食べられないような果物を預かってきたよ」

白雪「みどりとないちじくだこと。お父さまの庭になつていていたい」

女王「まあ、この高貴な果物を食べてごらん。お父さまの庭のとおなじくらいおいしいよ」

白雪、ひとつ食べる「まあ、おいしいこと。うちの庭で熟したみたいだわ」

女王「お気に召したら嬉しいです、王女さま。もうひとつどうぞ」白雪、もうひとつ食べる「どうしたのかしら。目が見えなくなつた。体がだるくなつた。胸が焼けそう」

女王「べッドにお休みなさい。少しよくなるでしょう」

白雪、去る。

女王「行くがいい。そのうちに苦しみさえ感じなくなるだろう。あの果物には強い毒を入れてあるのだ。……」

白雪、もどつてくる「ああ苦しい。ああ、終わりのない苦しみ。お腹の中で炭火が燃えているみたい。苦しい、苦しい。体がナイフで切り裂かれるみたい。ああ、こびとのカタムル王さま。」

倒れて死ぬ。

こびとの王様が、この叫びを聞いて、祈りをあげる。白雪姫に命をと唱えて地面を三度、杖で叩くと三人の妖精が現れ、白雪姫のまわりを三回まわり、つぼの水を彼女にかけて、去る。白雪、身をおこし、「私はどこにいるの?」

こびとの王さま「おまえは死んでいたのだ。わしが、呪いで生き返らせたのだ。……」

この台本は一読してわかるように、まったく写実的に場面を描写している。白雪姫が、果物を食べたあと「目が見えなくなつた。体がだるくなつた。胸がやけそう」と言って苦しみ始めたところから、白雪姫が去つた後女王が言う言葉「行くがいい。そのうちに苦しみさえ感じなくなるだろう。あの果物には強い毒を入れてあるのだ」は、まったく芝居のせりふになつてゐる。そして戻ってきた白雪姫は「ああ苦しい。ああ、終わりのない苦しみ。お腹の中で炭火が燃えているみたい。苦しい、苦しい。体がナイフで切り裂かれるみたい」と白雪姫が苦しみ、死んでいく様子も正に芝居のなかのせりふであり、場面である。ここには口伝えの昔話独特的の語り方はまったく感じられない。

アルバート・グリムは当時はグリム兄弟よりも人気を博していたマルヒエン再話者であったが、今日になってみると彼の作品を読む人は、専門家を除いてはまずいないであろう。グリム兄弟の質素な、大げさでない語り口のほうが、約二百年を経ても生き続けている。しかも広く世界中で愛読されているのである。写実的な激しい場面

の設定、そして強い表現の数々の言葉は、たしかに物語をドラマティックに読ませる、あるいは聞かせることができるだろうが、そのことは必ずしもその物語の長い寿命を保障するものではない。むしろ、グリムがとったような言葉少なの、そして質素な大げさでない表現が長い生命を得ているのである。

先に引用したグリム童話の白雪姫の三回殺される部分について、また別の面からも口伝え昔話の特徴を発見することができる。それは、三回の繰り返しの問題である。

先に示した、白雪姫が三回殺される場面は全文ではないので、三回のそれぞれの部分の長さが認識しにくいが、全文を検討してみるとそこに明確に三回の繰り返しがあることがわかる。

それは、白雪姫が一度目に商人のおばさんによつてひもで殺され、そして生きかえる部分が第一回目。第一回目は、白雪姫が年とった女によつてくしで殺され、生きかえる部分。そして三回目は、白雪姫がお百姓のおばさんによつて毒のリンゴで殺され、生きかえらず、しまいに王子によつてひつぎがもらい受けられ、召使たちがやぶに足をとられてよろめいた拍子に、毒のリンゴがのどから飛び出して生きかえる部分。この三つの部分に分けることができる。そして各部分の語りの長さは一回目に比して、二回目はややみじかく、三回目が最も長くなっていることがわかる。重要性という点から見ると、三回目が最も重要であることは明らかである。なぜならば、毒のリンゴによつて殺されて生きかえらなかつたからこそ、最後に王子との結婚が成就したからである。

昔話が三回の繰り返しを好む性質を持っているということは、二十世紀のはじめにアクセル・オーリークをはじめヨーロッパの研究者たちによって明らかにされた。そして今日では常識になつていて、しかし私は、単に三回の繰り返しではなくて、三回目が常に長く最も重要であることに注目する。

三回の繰り返しと言いながら、三回目が最も長く最も重要なという語り方は、日本の「猿媚入り」にも見られる。つまり、長女、次女が朝になつて父のところへ起こしにやつてきて、父とやりとりをする部分。そして、最後に三女が猿との結婚を承諾し、猿のところへ嫁入りする部分。この三回の繰り返しにおいても、三女の部分が最も長く語られている。そして、重要性という観点から言えば、三女が最も重要な働きをしていることは誰の目にも明らかである。

三回の繰り返しにおいて、三回目が最も長く最も重要なといふ語り方は、ここに挙げた「白雪姫」あるいは「猿媚入り」だけではなくて、非常に多くの昔話に見られる。しかも多くの民族の昔話に見られる現象である。これは音楽の場合にも現れる形で、ヨーロッパの音楽の理論のなかではバーフォームと呼ばれている。

バーフォームは標準型としては、二対二対四というバランスで形成される。それは中世の吟遊詩人によって好まれた音形であり、ドイツ音楽史のなかでも古典派の作曲家たちによつて非常に愛され、その後音楽のなかでは、今日に至るまで生き続けている形である。そればかりか、現代、日本の若者たちのなかで愛されている音楽にも極めてひんぱんに使われていることは、少し注意深く聞けば誰に

でも発見できることである。

このことは、私の見るところでは、昔話の持つ音楽的性質として他の関連した性質と共に論じることができるが、それは他の場所にゆずることにする。

グリム兄弟が十九世紀の前半において、昔話を本のなかに書きとめ、ほとんどの場合共通語に直す仕事をしたときに、現代の昔話理論では明らかにされている性質を敏感に感じとつて再話のなかに生かしていることは、驚嘆にあたいすると言えよう。

グリム兄弟が『子どもと家庭のメリヒェン集』作成にあたって、

昔話の特性となるべく保とうとしていたことは明らかに感じとれる。それは、本来口伝えの昔話を本のなかに文字として定着させる試みであったわけだが、その試みは現在の日本でも絶えず行われているし、これからも行われることであろう。その際に、グリム兄弟が四十五年かけて試行錯誤しつまとめたグリム童話集は、われわれに昔話の再話について多くのヒントをあたえてくれるということができる。もちろん、初版刊行から第七版までの四十五年という長い年月の間に、彼らの身分は大いに変わった。そのためには、言葉づかいの上で、昔話というよりも学者の言葉づかいがあちこちに見られるようになつたことは否めない。また、多少の装飾的な文章、説明的な文章が入れられたことも否めない。そうしたいわば反面教師の面も含めて、グリム兄弟の再話作業は、今日のわれわれに非常に参考になるものといふことができる。

注

(1) 小澤俊夫『グリム童話の誕生—聞くメリヒェンから読むメルヒェンへ—』(一九九二年、朝日選書) 参照

(2) 鈴木満「リューベツァールの物語」武藏大学人文学会雑誌
第二六卷・二七卷・二八卷

(おざわ・としお／白百合女子大学)